

令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

A 地域の特色学び講座 ～挑戦と創造～

これからの秋田を担う人材や、自然環境・地域人材の持続可能なつながりづくりに挑戦する方々の取組を知り、自らも地域づくりに取り組んでいくきっかけを提供する講座です。

No.	日 時	テーマ	講 師
A 1	6月10日 (土) 10:00～11:30	おのこの色を活かして wellbeingに生きられる風土を 共につくる	onozucolor 代表 石 田 万梨奈 氏
A 2	7月29日 (土) 10:00～11:30	この街で子どもを育てたい	NPO法人Yokotter 理事長 細 谷 拓 真 氏
A 3	8月26日 (土) 10:00～11:30	伝統と挑戦	有限会社柴田慶信商店 代表取締役 柴 田 昌 正 氏

A1 石田氏は、五城目町の地域おこし協力隊として企業支援、移住定住支援等に取り組んだ経験を話されました。高校でのアクティブ・ラーニング『ネコバリ・キャリアのつくりかた』の取組の中で、生徒たちが地元で働く人々の思いにふれ、自分のやりたいことで秋田に恩返ししたいと考えるようになったというお話が印象的でした。また、自分の今の心と体の状態を10点満点で採点し、自分を客観的に分析することでwellbeingな生き方を考えるミニワークショップを行いました。受講者からは「幸せな人生を生きるためのヒントがもらえた」との感想がありました。地域住民一人一人にとっての、持続可能な地域づくりの実現につながる講座となりました。



A2 医師、社会投資家など様々な「顔」をもつ細谷氏は、「生まれ育った横手を守るのは自分の義務」と言い切り、多様なアプローチで地域づくりに取り組んできたことについて話されました。地域活性化が必ずしも地域住民の幸せには結びつかない例を挙げ、仮に人口減少が続き横手が消滅しても、一人一人がハッピーになれる地域を実現する構想を示されました。そのポイントは、資本主義、社会主義、公共の3つをバランスよく発展させ、その中心を御自身が設立した町づくり会社が担うというものでした。また、秋田にいても首都圏に劣らない教育が受けられる環境を整備し、地元を支える人材を育てることの重要性を説かれました。受講者からは「新たな世界、知識に接することができ、有意義だった」との感想がありました。



A3 柴田氏は、古くから愛されてきた「秋田杉」と先代が築き上げた技術を守りながら、南部鉄器などから新しいアイデアを取り入れて世界に挑戦してきたことを話されました。「世界から大館に目を向けてもらう」という発想で、浅草や福岡の老舗百貨店に出店することで発信力を高め、商品のブランド化を進めた話が印象的でした。また、「伝統」・「食」・「交流」の拠点として『わっぱビルディング』を創設し、後継者の育成にも注力するなど、文化の継承・発展を意識した取組について紹介されました。受講者からは「革新的なものの見方や考え方が、大変参考になった」との感想があり、自然と伝統を活かしながら新たなことに挑戦するきっかけとなる講座でした。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

B サポーター養成講座 ～地域サポーターへのファーストステップ～

地域おこし協力隊の活動や地域課題としての子育て、若者へのサポート、家族介護などの実態を知り、持続可能な地域づくりについて話し合い、自分にできそうな取組を考える機会を提供する講座です。

講座 記号	日 時	テーマ	講 師
B 1	9月2日 (土) 13:30～15:00	秋田の若者の自立支援	NPO法人KOU 事務局長 大 屋 友 紀 氏
B 2	10月7日 (土) 13:30～15:00	秋田県民と介護支援専門員の未来創造	特定非営利活動法人 秋田県介護支援専門員協会 副会長 佐 藤 菖 子 氏
B 3	11月11日 (土) 13:30～15:00	次世代へつなぐまちづくり	一般社団法人 ドチャベンジャーズ 理事 丑 田 香 澄 氏
B 4	12月9日 (土) 13:30～15:00	誰かとつながる食料支援	一般社団法人 フードバンクあきた 代表理事 林 多 実 氏

[B 1] 大屋氏は、居場所事業・就労支援事業を専門分野とNPO法人KOUで相談支援員として取り組んできた様子を紹介されました。人づきあいを苦手と感じている若者たちやその保護者を応援し、どのようなことに心がけ接しているか述べられ、受講者からは「グループワークを通して自分が関わっているボランティア活動を考える上で、とても参考になった」といった感想が寄せられました。



[B 2] 佐藤氏は、介護支援専門員の役割や仕事内容を秋田県における高齢化の実態と関連付けながら説明され、特に大人に代わって責任を担い、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートを行っているヤングケアラーの出現が大きな社会問題になっていることを紹介されました。グループワークでは、そのような子どもたちを支援する体制を地域で整備し、ヤングケアラーたちが「助けて」と言える社会の実現を目指し、自分にできそうなことについて話し合いました。



[B 3] 丑田氏は、地域おこし協力隊として町に移住し、BABAME BASE（五城目町地域活性化支援センター）を拠点にこれまで取り組んできた事業について紹介されました。古民家や空き家、商店街の空き店舗活用と人のつながりづくり、520年続く朝市に若者や女性が新たな挑戦を踏み出す場づくり、内発的な挑戦の連鎖に新しく入居した方からのゆらぎを加えながら、地域の次世代が育つ環境をつくりたいと話されました。受講者からは「大きな刺激を受けた。自ら行動を起こしたい」という感想が聞かれました。



[B 4] 林氏は、「フードバンクあきた」がどのような経緯で立ち上げられ8年間どのように取り組んできた様子について話されました。生活困窮者が秋田市内でも多くいることや食品の提供だけではその家庭を助けるための解決策にならないことが話されました。グループワークでは「フードバンク」や「フードドライブ」など私たちにできる取組へ積極的に参加しながら、「より多くの人たちに地域社会の実態を知ってほしい」といった意見が交わされました。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

C 熟議ファシリテーター講座 ～わたしの「熟議」～

持続可能な地域づくりや課題解決に向け、熟慮×議論により、連携と協働を形成・促進する手法「熟議」。全4回の受講を通し、当センターの手法を基とする自分なりの熟議パッケージを完成させます。進行役のファシリテーション技術と熟議の本質について学ぶ機会を提供する講座です。

講座 記号	日 時	テーマ	講 師
C 1	6月3日 (土) 10:00～12:00	熟議における導入	秋田県生涯学習センター職員
C 2	6月24日 (土) 10:00～12:00	熟議における展開	
C 3	7月15日 (土) 10:00～12:00	熟議におけるまとめ	
C 4	8月5日 (土) 10:00～12:00	プレゼンテーション	

C1 最初に「熟議」を行う意義、「熟議」を進める上でファシリテーターが果たすべき役割、「熟議」の導入部分をいかに組み立てるかについての講義があり、続いて実際の「熟議」を縮小した形式で体験しました。何かを決定する会議のような堅苦しさをなくして自由闊達な意見交換の場にすることで、参加者が様々な考え方に触れ自分の考えが深まり、共感したり、自分事としての意識が醸成されたりすることが大事であり、そのための雰囲気づくりに心がけて「熟議」を組み立てることがファシリテーターの役割であることを学びました。



C2 「熟議の考え方、手法、進行、構想の立て方」と題して、熟議で用いるスライドの作成について学びました。「当事者意識をもつ(自分事として考える)ようになるためのテーマ設定」が最も大事であること、雰囲気づくりとしての「アイスブレイクのあり方」、参加者が話し合いの方向性を理解するための「提示資料」にはどのようなものが適切か、話し合いのラウンドごとにグループのメンバーを入れ替えることの意義などについて学んだ後、実際のスライドづくりを行いました。



C3 悪天候のため「熟議におけるまとめ」について、YouTubeの限定配信による講習を実施しました。

C4 前回はYouTubeでの配信となったため、最初に「まとめをどのように行うか」の演習を行いました。その後、それぞれの受講者が作成したスライドを使って「ミニ熟議」を行い、学習成果を披露しました。各自の立場(所属団体・自治会等)で今取り上げたいテーマを設定して作成されたスライドには、たくさんの工夫が見られました。「ファシリテーションは経験が大事であり、今回の経験を生かして、何度でも挑戦していったほしい」と講師による激励の言葉で講座は終了しました。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

D 障害者の生涯学習講座 ～学びのドアを開けよう～

年齢や障害の有無などに関わらず、だれでも体験や講義を通して学び、生涯学習への期待感を高められる機会を提供する講座です。

No.	日 時	テーマ	講 師
D 1	9月2日 (土) 10:00～11:30	音の優しさ、音の力 ～音楽療法について～	合同会社トゥールース代表社員 音楽療法教室リヴァ音楽療法士 平 川 真 実 氏
D 2	10月7日 (土) 10:00～11:30	知っ得アートテクニック！ ～自分の表現にちょい足ししよう～	秋田大学 教授 長 瀬 達 也 氏
D 3	11月11日 (土) 10:00～11:30	たいせつなお金 ～金銭管理、家計管理の基本～	秋田大学 准教授 堀 江 さおり 氏
D 4	12月9日 (土) 10:00～11:30	ボッチャの魅力 ～全国大会アスリートの 体験談、ボッチャ体験～	秋田県ボッチャ協会 齊 藤 悠 人 氏 後 藤 成 人 氏

D1 平川氏は、音楽療法を通じ音楽のもっている様々な力や効果を利用して対象者の問題点や課題点等を回復改善していく取組をされていて、そのためには、高齢者、子ども、入院患者、地域住民等、それぞれに合わせた音楽療法を展開することが大切であると説明されました。後半部分では音楽療法の体験を行いました。リズム遊びや座ってできる体操、「上を向いて歩こう」を歌い、リラックスした状態を感じ、音楽療法の効果について体験的に学ぶことができました。



D2 長瀬氏は、自分がいつも描いている絵にちょっと工夫することで、絵がおもしろく、素敵になることを説明されました。そのために筆や鉛筆、クレヨン、ペンなどでは表せない、モダンテクニックのシャボンアート・バブルアートを実演し、その後、体験を行いました。参加者は台所用洗剤を水で薄めた液に、金や銀の絵の具を入れ、ストローで吹いて泡を作り、黒い画用紙の上に模様を描きました。受講者は、円形の美しい模様が表現され、絵を描く楽しさを実感していた様子でした。



D3 堀江氏は、金銭管理・家計管理において、収入と支出を管理することを強調し、収入を給料や工賃、障害基礎年金、支出を定期的に必要なお金、突然必要になるお金などと明確に分類しました。支出を管理するためには家計簿を作成し分析することで、お金を使う際の自分の「癖」を見付けることができることも強調され、お金の貸し借りはしない、「安い」や「お得」に飛びつかないなどの注意点についても確認しました。最後には質問を受け付け、個々に応じたアドバイスをし、受講者は、課題解決に向けてヒントを得た様子でした。



D4 前半部分は、齊藤氏が今までに感じた社会的障壁や全国大会へ出場した体験について話され、受講者が共生社会について考える機会となりました。また、後半部分では、後藤氏がボッチャは障害者、健全者、年齢、性別問わず、同じルールで楽しめ、競うことができるスポーツであることを説明されました。

受講者は、講話、体験を通して、2人の講師の方とやりとりをしながら交流し、ボッチャの楽しさ、人と関わる楽しさを感じ取り、共生社会に向け、充実した講座となりました。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

E 防災講座 ～防災は日常とともに～

災害時の状況や課題を知り、日常的な備えや生活の工夫、地域・企業連携について考えを深めることで、防災意識を高め、実際の防災行動に結び付ける機会を提供する講座です。

講座 記号	日 時	テーマ	講 師
E 1	6月10日 (土) 13:30～15:00	新しい防災の考え方と避難行動支援	日本赤十字秋田短期大学 講師 及 川 真 一 氏
E 2	7月1日 (土) 13:30～15:00	浸水被害に立ち向かう災害ボランティアの力とネットワーク	社会福祉法人 五城目町社会福祉協議会 事務局長 加 藤 雄 一 氏
E 3	7月22日 (土) 13:30～15:00	家庭の防災と気象情報の活用法 ～防災カフェの取組から～	秋田朝日放送株式会社 気象キャスター 和 田 幸一郎 氏
E 4	8月5日 (土) 13:30～15:00	地域の防災対策について ～災害から身を守るための取組～	大仙市総務部総合防災課 防災管理監 成 田 聖 氏

E 1 講師の都合により中止になりました。

E 2 加藤氏は、災害ボランティアの実際の様子や心構えなどについて、特に五城目の大雨被害の状況や、実際にボランティアコーディネーターとしてどのような活動をしたのか、写真を交えながら詳しく述べられ、受講者にとって大きな学びになりました。後半は、参加者を交えたワークショップを行いました。たくさんの意見が飛び交う活発な意見交流となりました。



E 3 和田氏は、近年の気象状況から、今後も考えられる大雨・大雪など、自然災害について詳しく説明されました。受講者からは、「マイタイムライン（計画）を初めて知りました。レベルにあった対応を各自が考えておくといいと思いました」、「早め早めの対応の重要性を分かりやすく映像を含め説明いただきました」などの感想がありました。災害前の準備から発生時の対応、そして避難行動についての大きな示唆をいただきました。



E 4 成田氏は、ご自身が勤務されている大仙市の防災対策を中心に、自治体からのハザードマップなどを活用することや様々な防災訓練の様子について述べられ、「自助力」の向上の大切さについて説明されました。受講者からは、「最近各地で災害が発生している。普段からの心構え防災意識を高めたい」、「昔から水害対策を行ってきた取組のおかげで安全に生活できることを改めて知ることができました」などの感想があり、大きな学びの機会になりました。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

F 東大史料編纂所協力講座 ～歴史を伝える手紙～

東京大学史料編纂所の研究者から、様々な史料に基づく研究成果を直接学び、最先端の歴史学の成果に触れられる機会を提供する講座です。（講師リモート講座）

講座 記号	日 時	テーマ	講 師
F 1	8月19日 (土) 10:00～11:30	古代の人びとの声	東京大学史料編纂所 准教授 新井重行氏
F 2	9月9日 (土) 10:00～11:30	紙背文書とその世界 ～貴族たちの生活と交流、政治～	東京大学史料編纂所 助教 海上貴彦氏
F 3	9月30日 (土) 10:00～11:30	書く武士	東京大学史料編纂所 助教 小瀬玄士氏
F 4	10月14日 (土) 10:00～11:30	イランの消費文化 ～オランダ東インド会社の 報告書を手掛かりに～	東京大学史料編纂所 助教 大東敬典氏
F 5	11月4日 (土) 10:00～11:30	書状の距離感	東京大学史料編纂所 教授 小宮木代良氏

F 1 新井氏は、正倉院文書から二通の手紙を取り上げ分析を行いました。二通の文書からは、当時通用していた漢文の句法から日本語の表記法に変わりつつある状況と、中国から「律令」に続いて「礼」の継受が試みられていたことがわかりました。



F 2 海上氏は、公的な文書からは見えない日常的なやり取りや当時の政治史の裏側、新事実の発見等の情報に富む紙背文書を取り上げました。子を想う親の姿や、源平の争乱期に多くの荘園を保持し影響力を行使した女院と源平の武士とのやりとりなど、政治史からはたどることができない様々なやりとりを知ることができました。



F 3 小瀬氏は、鎌倉時代の武士の識字・漢文教養について、それほど高くないという説がある一方で、漢文を用いた文書行政が行われていたことに触れ、その背景に、識字率の低い地方御家人が僧侶や朝廷系の官人や、鎌倉・京・博多等にいる「代書屋」とでも言うべき集団を利用したことを学びました。



F 4 大東氏は、高温多雨地域で栽培が始まった砂糖の消費が、中東地域を経由しヨーロッパへと拡大していく様子を、オランダ東インド会社の報告書を見ながら確認しました。



F 5 小宮氏は近世前期（16c末～17c前半）にかけて、書状による情報伝達の全国的な広がり、その量の飛躍的な増加が見られるようになったことに触れ、それらの書状を、遠隔地間／近接地間の場合で形式が異なることを確認し、コミュニケーションにおける相反する2つの特徴（相手へのおそれ・はばかり／相手への接近の希望）を分析しました。



令和5年度 あきたスマートカレッジ 講座内容報告

G 北条常久特別企画講座 ～子どもと一緒に楽しみたい児童文学～

読んでもらったり、一緒に声に出して読んだり、幼少期から常に触れ親しみ、楽しんできた児童文学の魅力と楽しさを味わう機会を提供する講座です。

講座 記号	日 時	テーマ	講 師
G 1	5月20日 (土) 10:00～11:30	秋田のむがしこ ～令和の子どもたちに伝えたい 『秋田の民話』～	秋田県生涯学習センター シニアコーディネーター 北 条 常 久 氏
G 2	6月17日 (土) 10:00～11:30	児童文学の魅力にとりつかれて ～『八郎』から『ズッコケ三人組』まで～	一般社団法人 日本児童文学者協会理事長 あきた文学資料館資料収集委員 藤 田 のぼる 氏
G 3	9月16日 (土) 10:00～11:30	『赤い鳥』に憧れて	秋田県生涯学習センター シニアコーディネーター 北 条 常 久 氏
G 4	10月21日 (土) 10:00～11:30	桃太郎はどう語られてきたのか ～時代とともに移り変わる桃太郎像～	秋田県立図書館 館長 菅 原 敏 紀 氏
G 5	11月18日 (土) 10:00～11:30	『黒紙の魔術師と白銀の龍』に込め た思い ～私が届けたいもの～	2021年 講談社児童文学新人賞受賞 作家 鳥美山 貴 子 氏
G 6	12月16日 (土) 10:00～11:30	新しい日本児童文学史	秋田県生涯学習センター シニアコーディネーター 北 条 常 久 氏

G1 北条氏は、全6回の児童文学に関するオリエンテーションとして、「民話」と「児童文学」との関係について話されました。最初に民話の分類について説明され、続いて「口伝の民話」を集録した『秋田の民話』から「山姥の錦」を題材に絵本となった「やまんばのにしき」が紹介されました。県立図書館デジタルアーカイブに収録された「長福山の山姥（山田みのる氏朗読）」と比較しながらそれぞれの特徴を取り上げ、受講者は新たな発見が得られた様子でした。



G3 北条氏は、1918年(大正7年)雑誌『赤い鳥』創刊モットーに「ただ単に、話材の純清を誇ろうとするのみではなく、全誌面の表現そのものにおいて、子どもの文章の手本を授けようとするものである(旧仮名遣いを改め、現代語に訳した)」と記されていることを紹介し、創刊当時「綴り方」の教科書はなく、『赤い鳥』をその教科書にしようとする関係者たちの意欲が感じられ、これに秋田で呼応したのが、『北方教育』を創刊した成田忠久氏や滑川道夫氏、加藤周四郎氏などの教育者たちであることを話されました。秋田における「綴り方」教育の始まりと、初期の様子について学ぶことができました。



G4 菅原氏は、「桃太郎」の伝承は全国で153種類に分けられ、お供が猿・犬・雉だけではないことや、目的地も様々で江戸時代の享保8年(1723年)の『もも太郎』(赤豆本)が初出とされ、安永6年(1777年)に『桃太郎昔語』で広く知られたことが紹介されました。明治時代の教科書に登場した桃太郎は共通語の口語体で書かれており国語教材として取り上げられ、大正末に芥川龍之介の「桃太郎」の他、昭和初期の江口渙の「ある日の鬼ヶ島」など、時代背景を反映した桃太郎像が描かれていたことを学びました。

